

「読み合わせ」を意識した活動による会話授業デザイン

橋本慎吾

「ある場面・文脈における適切な表現を繰り返し行なう」という演劇の特性を取り入れた「演劇的アプローチ」による日本語教育を模索しているが、今回は演劇の稽古における「読み合わせ」を取り上げる。

筆者は 2008 年に平田オリザ氏が主宰する青年団の新作舞台稽古を見学した。稽古では一番最初に台本の「読み合わせ」が行なわれた。新作なので俳優にとっては初見の台本であっても問題なく「読む」ことができる。しかしここでの「読む」段階は演劇の音声としてはまだ何もできていない状態である。2 回目以降の読み合わせでは演出家（平田氏）が細かく指示を与え、俳優はその指示によって読み方を変えていく。また、平田氏の場合、演出家であり脚本家でもあるので、台詞を書き換えることもしばしばある。台詞の変更は、読み合わせの段階だけでなく、俳優が台詞を覚えての稽古の段階でもなされる。台詞の自然さが各段階で総合的に判断され、修正がなされ、最終的に自然な会話として公演が行なわれる。

このように、「初見の読み合わせ」→「演出家の指示が入った読み合わせ」→「台詞を覚えての稽古（小さなシーンごと）」→「稽古（通し）」……という流れで稽古が進んでいく。

振り返って、日本語教育で行なわれている「会話文の読み」は、導入する教授項目の実際の使用例の一つとして作られた会話文を読む。ここでの「読み」に求められるのは、通常正しく読む（単音やイントネーションなど）、流暢に読むということであろうと考えられる。この練習はとても重要であるが、そこで終わってしまうと、「短文の読み」と大差がなく、「会話文」を読む意味があまりない。

そこで本発表ではここまでの段階を演劇の稽古における「初見の読み合わせ」と位置づけ、「会話文」を「会話」として使っていくための会話授業デザインを試行する。